

## 談 話 室

講演者が学会発表で気を付けて  
欲しいこと

大 谷 正 康\*

(社)日本鉄鋼協会及び(社)日本金属学会の秋季講演大会に出席し、限られた講演発表を聞いた。他会場の発表も同じとは思わないが、共通する、気掛かりな諸点を挙げてみよう。

講演発表は自分達の研究成果を会員に分かりやすく知らせ、討論し、より優れた論文に仕上げる前段階であろう。この原点に立つとき、注意して欲しいことが多々ある。

1. 講演者の語尾の声が小さく、聞きとりやすく、明瞭でない。

2. 原稿を棒読みする若い研究者が多い。原稿を読むことによる安心感はあるが、自分の行った研究で、これについては一番良く知っているという自信を持てば、図・表を見て講演できるはずである。これと反対にとくに、外国語で発表するときには、読むべきだという意見もあることを付記する。

3. 時間の割に、図・表が多く、それぞれの説明が不十分で聴衆に理解できない。また、小さな活字が並びはつきり見えない。

講演者が「この図、表は見づらくて申し訳ありませんが…」と聴衆に詫げるケースがたびたびある。

一番近くにいる講演者が見づらいものは、より遠くの聴衆にはさらに見づらいことは自明の理である。このような詫げ言を必要とする図、表は示すべきではなく、次のような諸点を考慮して明瞭かつ識別できる図、表に改めて欲しい。

スライドの中に、何行ぐらいの文字や数式を入れれば良く分かるかについて、次のことが参考になるであろう。

・Cross の第 1 法則：「横型のスライドでは、7 行以上の文字や数式を入れてはならない」

弁別し得る視角は、専門家によれば  $9^\circ$  となっているが、会場の大きさ、スライドの映写距離によって弁別可能な文字の大きさは異なるので、大体、7~8 行がマキシマムということになる。

縦型のスライドに換算すれば、36 mm フィルムの縦横の比は 3:2 だから、11 行以内ということになる。

・Cross の第 2 法則：「2 枚前のスライドを映写して欲しいと要求してはならない、もし同一のスライドを 2 度にわたって見せる必要があるときには、そのスライドを 2 枚用意しておいて、正規の方法で見せるべきだ」

というのである。(中村輝太郎編著：英語口頭発表のすべて(昭和 57 年), p. 57 [丸善])

口頭発表の内容を正確に伝達するために、スライド、OHP を使うものであり、

a) 最も大切なことは、1 枚の図の中に、いろいろな量の曲線が入り組んで画かれているような複雑な図は用いないこと。

b) Cross の法則に従う図・式を準備すること。

c) 研究結果を表す数値表は、代表的数値例にとどめ、小さな数字のギッシリ詰まった表などは用いないこと。など。

## 4. 発表者の説明位置

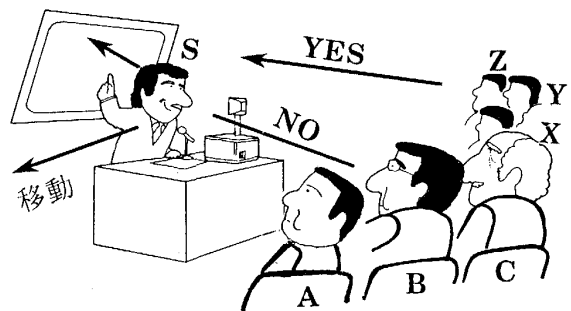
漫画を見ていただきたい。聴衆 X, Y, Z からは図・表は良く分かるが、A, B, C からはブラインドになっている。発表者 S は状況を見て、移動し全員に見えるような位置で説明すべきである。

## 5. 講演概要の訂正について

講演者が会場で講演概要の訂正を行う場合がかなり多い。判読できるような些細な誤りについては問題はないが、数式の訂正は重大である。会場にいる聴衆は、全体の会員数からみればごくわずかであり、大部分の会員はその訂正を知らない。

これはむしろ協会側の対策として考慮する必要がある。たとえば訂正分を講演者から提出してもらい、「鉄と鋼」誌上にまとめて掲載し衆知させることも考えられる。

その他いろいろあるが、紙数の都合で省略する。解説書<sup>†</sup>などを参考にされたい。なお、学校、会社を問わず、指導者、上司、とくに、講演会場の座長が、これら諸点について注意、指摘し、講演大会がより望ましい発表の場になるよう努力していただきたい。



発表者の説明位置 (中村編著, p. 39 の図に準據)

<sup>†</sup> 例えば, J. G. GRAY, Jr 著, 宇都宮敏男, 寺倉郁子共訳: 効果的な技術発表「その戦略と秘訣」(昭和 63 年 12 月) [丸善]

\* 東北大学名誉教授 (株)神戸製鋼所常任顧問 工博